

果樹園

『新壘』  
54-1号

落ち林檎の腐臭ただよふ果樹園におそき夕暮れそれ  
よりの闇

夜の闇を見透かす猫の総毛だち平和と言ふも怖ろし  
き過渡

菊祭り菊に迷惑な季到り切味の音高き花ばさみ

かし

少女期の思案に似せ霜月の空にやや傾がる夜の起重機

他界より晚餐に来て喰ひ漁る死者の飢餓感吾れの孤  
独感

白き鍵盤

『新壘』  
54-2号

他人より尚そつぽ向く血縁の立てめぐらせる塀の内外

うちそと

目刺しとふ酷き言葉も疑はず食べし夕べ四とり落とす

たう

自らへの謀叛ひそかに企つる手のうち熱し見せてはならぬ

徇格伏せし中古ピアノに集れる指にさしづめ白き鍵盤  
勢ひよくシッターは上りしづしづと入る車の荘嚴な  
らずも

積み上げし雪はわれの隠れ蓑ひとつ思想のくらぐら育  
つ

思ひつきり鬱への埋没きさらぎの雪は降るべき陽はい  
照るべく

吹雪く夜のかなたに灯るシグナルを見届けてより歩  
みいでたる

きさらぎのかかる夜の月くまなくて裡なる蹶起不意  
に喚ばはむ

尼僧の失踪に終むみ堂の火事たれも噤むとすきさら  
ぎ

三月の雪容赦なく身へは降り誤解をとく手だてと共に昏らめり

見届けし何に危ふく降りて来し昇りつめたる夜の昇  
降機

なかなか冬を逃れ得ずひとを待ち季を待ち方形の  
空に梳る

をみなとは永久の罪人ガラス器に種子ごと搾る縦割樽  
椽

誰がをどめ長き黒髪を風は捲きまきもどされて冬の  
飢急や

雪の轍

『新壑』  
54-6号

雪消えて身の内ゆるぶ老ふさや睡りのなかの空中ぶら  
んこ

宥しるるは翳りやすき日の錯覚か雪の轍に足奪はるる

とられたる足よりもすでに瞳は昏み春泥の中の月の散  
乱

転倒の身支ふるすべを知らざれば缺けそめし月の高さ  
嘲笑

ひと束の蕨は水に尚皺み砕かれてるしわが未来像

今日生きしも夕焼け空に滲ませてほの温きかな春の  
逃避は

しやうび

薔薇の棘ほどの尖りとやさしめる会話とぎれて風素通  
りす

桜花も終へ人の命の果てし夜寂かなり永久の別離と  
云ふは

死者のため黄泉路明るき道しるべ人はあまた灯笼に  
火ともす

死者への讃辞おびただし妻の座より移行して美しき  
喪主の座

刃型の蘭

『新壑』8  
54-8号

初夏の花のまばゆき夕暮れを「通せんぼ」せるは誰が水  
子なる

ぴりりと辛きたとへにありて山椒の流す小粒の泪とめ  
どなからむ

よこしまを糺すとせるはみどり濃き刃型の蘭のひかる  
ひとふり

折  
藤棚の闇のふかさよかなしみは前触れもなくて人の天

夏雲の容するどき野を往きて還らぬものへのふかさあ  
くがれ

昏き森

『新壑』  
54-9号

われにいつ来る叛乱か櫛目とほらぬ髪を月下にもて余  
す夏

歩むとも踏みとどまるもシグナルに従ふほかなく夏陽  
の直下

うつし世の森をくらぐら踏み入りこころの闇にくらぶ  
はひ  
べくもなき

企てしのみを終りたる旅のそれより地球儀は無為の  
球形

離り住む息子らとの便り日々疎くポストの位置の遠  
き距離感

八月の陽

『新壘』  
54-10号

道ゆきて万の魂とすれ違ふすれ違ひたる際の八月

あまねくも陽は鎮魂にのみ燃ゆ きらめきて八月の墓  
碑たちは在り

ゆきづまるわれの八月数行の詩歌のために仰ぐ向日葵

八月 陽はかぎりなくものを灼く焦きつくすなれば俯  
く向日葵

たあいなくをどこ懺悔ひつ提げて炎暑の昼の鈍き足ど  
り

紫紺の茄子

『新壘』  
54-11号

所詮は手なづけられぬ風の向き青年帽子の鏝あふら  
れて佇つ

研ぎたての薄刃庖丁の試し切り紫紺の茄子はいま頭  
断たるる

躁ならずまた鬱ならぬ身が研ぎし薄刃庖丁のかかる  
謔けさ

誕生日さはりなく来て十月こそ吾にかなしき亡母の  
産み月

枯黍の葉擦れにまじるわが産ぶ声のはそるばかりと亡  
母の記憶に

葡萄の秋

『新壑』  
54-12号

葡萄の実がふと眸の羞しさを持つかかる慈しみこそ夜の

かて

わが糧

なべての時計いつせいに刻を指すその同時性に深夜ふと  
怯ゆ

深夜奏づる国歌をもつとも否定なすしかすがに戦後  
なほ莊重たり

みづからを蔑む日の果て湖はふくよかなまでくれなる  
湛ふる